

小学校現職教員の表現運動・ダンス指導力の変容に関する一考察

ー ライフヒストリー法による分析を通じて ー

A Study on the Development of Teaching Competencies for Expressive Movement and Dance among Primary School Teachers. ～ Through the Method of Life History Analysis ～

小 松 恵理子
Eriko Komatsu

鹿児島女子短期大学

中学校のダンス必修化や現代的リズムダンスの導入により、学校教育におけるダンス活動が盛んになりつつある。実際にどのような実践がなされ、課題があるのか現職教員のインタビューを通じて、指導力のある教育養成のための基礎的資料を得ることを目的とした。教員経験6～30年以上の小学校現職教員に表現運動・ダンス指導について構造化インタビューおよびライフヒストリー法によりその価値観や課題意識を通じた自己認識による指導力の変容を明らかにしようとした。その結果、経験年数の少ない教員とベテランの教員のいずれも表現運動・ダンスに対し児童の自己肯定感やコミュニケーション能力を高めることができるといった価値観を有し、課題意識も相似している。自己認識としての指導力が変容・改善していく切掛けは、指導力のある先輩教員との出会いや自ら求めて学ぶ姿勢を貫き、研修会等への参加あらゆる機会を捉え学ぶ機会を増やすことが肝要であることが明確となった。

キーワード：表現運動 ダンス 小学校 現職教員 ライフヒストリー法

1. はじめに

表現運動・ダンスでは、身体運動を中心に人間相互の表現・伝達・交流が行われる。³⁾ 表現とは我々個々人の心的内容を享受者の知覚できる形にすることであるとされている。すなわち他者が、我々の創り出す身体運動を五感を通じて知覚することにより、内的世界を共有する行為といえよう。

ダンスの教育的価値は、感性を豊かにし創造性を育むこととされ、幼児教育においては五領域中の「表現領域」に置かれている。さらに学校教育では、体育科の学習指導要領に中に取り入れられている。

また、その機能的特性として、①リズムに合わせて踊る事により心身の開放ができる。②自己のイメージにもとづき、動きを工夫することにより美的表現を創りだせる。③互いに鑑賞し合う事により、感性を開いてコミュニケーション能力の向上が望める。④自文化への理解も深められる。といった点が挙げられている。³⁾

このような価値が認められている一方で、その指導が難しいとの声が聞かれる。寺山は、表現運動・指導の困難さとして、授業中では「学習者への対応」「動きの引き出し方」「指導言語」を、授業外では「教材準備」「学習者の実態」「時間教の確保」等を挙げている。⁵⁾

榎・小松¹⁾の調査においても自信も持って指導している教員は10%未満であった。同調査においてダンスに対する教員の好嫌度と指導観については正の相関がみられている。 $(0.3 < r < 0.7, P < 0.01)$ ダンスそのものに対する印象が良い教員はダンスの指導においても自信をもって取り組んでいる可能性が高い。この調査ではダンス受講経験との関連は認められなかったが、経験した授業の内容も含めて検討する必要があることが今後の課題として残されている。

ダンス指導に自信がない指導者が多い中、ダンス指導に自信を持って取り組んでいる小学校現職教員はどのようにして、その時点に到達したのか？

本研究では、熱心に表現運動・ダンス指導に取り組んでいる現職小学校教員に日頃の指導内容や課題等を明らかにすると同時に、各人のライフヒストリー図作成し、指導力の変容について分析し、表現運動・ダンス指導に自信を持って取り組む指導者育成方法の基礎的資料を得る事を目的とした。

2. 研究方法

本研究では、鹿児島県内の小学校現職教員7名に構造化インタビューを実施し、ライフヒストリー図を作成してもらった。インタビュー結果及び各人のライフヒストリー図

を用いた表現運動・ダンス指導の自己認識による指導力変容の分析をおこなった。

① 構造化インタビュー

ダンス指導全般についての質問項目として、寺山⁶⁾が実施した熟練指導者へのインタビューを参考に追加修正して作成した項目を中心に実施した。

② ライフヒストリー法

近年、より科学的で数量的な分析により、統計調査を主とした量的研究が主流となっている一方で、質的研究に基礎を置く必要性も説かれている。

表現運動・ダンス研究においても、アンケート等を通じた量的調査は広く行われており、類似した結果が得られている。表現運動・ダンス領域において、プロの舞踊家を対象とした研究は散見されるも、一般教員個人を対象とした研究については多くみられない。そこで、本研究においては、特に小学校現職教員個人を対象とした質的調査を用いることとした。

中野は、ライフヒストリーを「人が主体的に捉えた自己の人生の歴史を調査者の協力のもとに、本人が口述あるいは記述した作品である」としている。ニカラグアの教師のように、目まぐるしく政権が入れ替わる環境での教師の能力変容に関する研究もある。²⁾ 安定した環境における日本人教師、特に女性教員にとっては、就職、結婚、出産といった個人に関わる内容によって変容していくことが考えられ、ライフヒストリー法及びライフヒストリー図の作成を用いることとした。

3. 結果と考察

(1) インタビューによる対象者

①MK：3年半の期限付きを務めた後、正規採用となり6年目、現在鹿児島市内で勤務。高校・短大とダンス部に所属。

②RU：教員歴12年目。音楽専攻で短大時代は、ダンス経験は無かった。中学校音楽教員免許を持つ。のちに通信教育で小学校教員免許を取得した。

③MH：教員歴15年目。高校時代に取り組んだ地元の郷土舞踊に取り組むことで踊ることが好きになった。大学時代はダンスの授業は受講していない。幼稚園勤務の後、小学校の期限付き教員として勤務した。その後、正規採用となった。小学校教員として勤務を始めた頃、地元の郷土舞踊に児童とともに取り組んだ。また、任意団体である女子体育研究会に参加することによって先輩指導者と出会い、ダンスに取り組むようになった。

④MA：教員歴17年目。ダンスは好きな方であったが、

教員勤務開始直後は表現運動に取り組んでなかった。

6年目から任意の女子体育研究会に加入して勉強した。

⑤YK：教員歴25年目。短大時代、ダンス部に所属。RSと同級生。

⑥RS：教員歴25年目。器械体操・新体操経験者。短大時代の指導者との出会いが長く指導の核になっている。本県小学校の表現運動・ダンス指導のリーダー的存在。

⑦SK：教員歴31年目。大学入学までダンスとは縁がなかったが、大学時代の授業担当者に勧められダンスを始めた。

以上7名の教員に以下の質問を行った。

結果は表1-1、1-2に示した通りである。

(2) インタビューの結果から

1) ダンス指導を積極的に継続している理由

小学校体育科の指導領域として、「表現運動・ダンス」が設けられており、小学校教諭として指導に取り組むのが当然としながらも、いずれも基本的にダンスが好きである・得意分野であった。という回答であった。梶・小松の調査からもダンスのダンスに対する教員の好嫌度と指導観の結果とも一致している。

2) 基本的な指導方法

いずれも、低・中学年では、最初に「だるまさんが転んだ」やイメージカルタ・新聞紙等を取り取り入れた即興表現から表現活動へ進んでいる。

高学年では導入にリズムダンスを取り入れ、ダンスに抵抗を示しがちな児童にスムーズに取り組める工夫の手立てとして、踊る楽しさを知るところからアプローチしている。そこから、身近な題材に関するイメージバスケットやイメージマップの作成（題材に対するイメージの掘り起こしに役立てる）から動き・作品創りへと進み、皆で鑑賞し合うと言う手立てを取っている。

3) 基本的指導方法の魅力

各自の指導方法の魅力については、経験の少ない子どもたちには新鮮な体験となる。楽しさから入ることができ、恥ずかしさを軽減できる。自由に発想できることで、日頃みない子どもたちの様子がみられ、他教科ではみられない新しい面を見いだすことができる。お互いを認め合えるなどが挙げられた。

4) 単元計画の種類

児童の実態によって、ステージ型、スパイラル型の両方がみられた。

5) 即興表現導入の有無

基本的な指導方法として即興表現は定着している。発想を柔軟にし、動きを自由に創出するのに有効であ

(表1-1) 被験者のプロフィール及び表現運動・ダンスに対する価値観・指導法概要

[illegible]

(表1-2) 被験者のプロフィール及び表現運動・ダンスに対する価値観・指導法概要

被験者	MY	RS	SK
教員歴	25年目	25年	31年
表現運動・ダンス指導歴	有休休暇中を除き、年1回は実施していた。25年。		31年
その理由	体育の指導領域の中にあることと、ダンス好きであることから実践していた。	好きだったし、得意分野だった。教育課程に組み込まれている。	大学時代にダンスが好きであつた。小学校の教員として科目担当者として当然のことだから。
基本的な指導方法	・低学年・まねっこ遊び→走る(カード)→半田などテーマのイメージを大きな紙に書き、図ターペに貼って表現。 ・高学年・リズムダンス→火山等のテーマの提示・作品作り・グループ毎に発表する会を実施	即興から作品作り	即興から始め、音楽に合わせてリズムダンスへと進む。それも音楽合わせて即興を行う。それ以降に表現へ進む。授業開始以前、日頃から他教科や体育の他領域でスタートし、心と体をほぐしておく。
その指導方法の魅力	低学年では、生き生きと必死に取り組みがかわいく、高学年では、人間の勉強となる。運動の苦手な子どもが花開く。	他の教科や科目の授業形態と異なり、経験のない子供供を相手にこれまでにない斬新な体験となり、とても楽しんでいる。作品作りは達成感を感じることができ、他教科では見られない子どもの新しい価値を見出すことができる。	子どもが生き生きしてくる。子ども同士、教師と子どもが仲良くなる。
単元計画(型)	スライラル型。	通常スライラル型 実態に応じてステージ型	ステージ型が多い。「あえてI」で基礎を固め、「あえてII」で目標を立てて達成する。
即興表現をとりいれているか	・取り入れている。表現の時間だけでなく、音楽の時間にも取り入れている。	取り入れている。	取り入れている。
即興表現からどのようなように授業展開させているか?	・低学年: まねっこ遊び→他の人に模倣→場面を繋げる→短いまとまりを作る。 ・他の人の模倣で終わる事も多い。 ・高学年: 好きな曲で踊る→動く楽しさを感じてもらふ。→そこをベースに短い曲の感じを見つけ、テーマをつける。	・経験の少ない児童の場合や単元の始め部分は、即興だけで終わることもある。 (5時間)のうち、2〜3時間) ・作品作りは「始め、中、終わり」の「お話作り」をする。例: 「修学旅行」到着→迷子→けんか→仲良く記念写真!	即興を基に、自分の動き作りに入る。グループではなく、個人に焦点を当てる。最後は全員がゴールは一人ひとりが作れるようになることとしている。(32枚程度)・作品作りや舞台発表に準備については、前とは別に発声カードを使用し、総合的学習の時間などで取り組んでいく。時間不足を補うためなくなくきちんと目標をもたせて実践している。例えば「自己を見つめる。」「今」等をテーマとしている。
学習者に取って表現運動・ダンスの魅力とは?	楽しい、またやりたいという子が多い。運動が苦手な子どもでも踊れる。夢中になれる。ただ、運動会でのソーランや英サマーは好きだが、表現は好きでないという2極化傾向のがある。	楽しさ、リズムにのる楽しさ。友達と共に非日常的なことをやれる。遊びを通して様々な力が発揮できる。普段は大人しい子が非常にいい表情で踊ったりする。他の領域ではできない運動を経験できるし、思い切りやりたいことがかなえられる。技術差や優劣がない。	開放感、やっつけて気持ちいい。楽しかったという感想を持てる。高学年は、自分にはこういうことが出来るよと自分の所見が見える。運動嫌いな子も出来るという実感が持て、自己肯定感が高まる。
表現運動・ダンスを通じて学習者にみにつけさせたいこと	・気負わずに自分をだすこと。・表現に正確はいいので思いつくままやってもいいというのをわからせてほしい。自分を表現するのは楽しいというのをわかってほしい。開かれた時にしつかり答えられる。動くことを身につけたい。	・自己表現力・自分を出せる力。作文や絵などが苦手な子にももう一つ一つの表現方法とした身につけて欲しい。 ・ダンス活動を通じて体力がつくことがよく良い。他のトレーニング方法では頑張る場が必要であるが、ダンスは楽しみながら体力をつけることができる。 ・踊るようなマイムで終わる。・空間構成が難しい。	明る・前向きに元気になること。何事にも積極的に取り組む事が出来るようになる主体性。
授業内容から創作表現へ繋ぐ際に着しい点	・ダンスは好きだけど、「〜感じ」ということが身体ででない。「感じ」がわからぬら。体験が少ないのでイメージが乏しい。身体感覚が乏しい。	・ダンスは好きだけど、空間構成が難しい。	日頃から、子どもの動きをタイミング良く褒める。何でもありな思考でやるのが大切。その気にはさせるときは難しい。思いっきり教師も表情豊かに応答したり、子どもの動きを真似てみせたりする。意見交換の場を設けること。・ワークシート等で自分の考え等を記入することでのよのよの動きがいかにかわかってくる。子ども自身も見ることが出来る。動きの工夫など、ワークシートや資料で提示する事も大切である。
授業内容から作品へ繋げる時のポイント	・時間不足が一番である。なかなか作品まで行かない。	・流れの中に、ジャンプやターン・滑りした動き等を導入し、マイムを開くリズムパターンにする。難しいが、空間構成を工夫する。自分はそこが面白い。	個々の動きは子どもも提供できるが、舞台発表の時に空間構成が難しい。また、授業中に考えた動きを不足する。子ども自身も教師が指示したり、話し合いながら提案したりする場面もある。時間不足がある事は否定できない。
表現運動・ダンスは必要か?	・必要	必要である。	必要である。
その理由	・生きる力につながる。自分を出せる。自己表現・自己主張ができるようになる。 ・他の人と共同で仕事する際に経験しなくてはならない。相手を受け入れ意見交換をしなが、一つの方向へまとめていくプロセスは、人生の様々な局面に繋がる。	開放感はない魅力がある。子どもたちが多様な経験ができる。どの子も楽しかった。また踊りたいという。達成感を感じることができ、向よりも自己肯定感が上がる。	これはとても良い教材はない。教育に不可欠であると思っている。個々の子どもに合ったダンスだけでなく、子ども自身もダンスの存在を認める。認め合えるには表現運動・ダンスだけである。自由にやらなければならない活動である。それだけに難し点もあるが、
大学時代に学んだことで役にたったことは?	・ダンス部でかなり練習量をつなした。それがあったので様々な場面で頑張れた。・唐で諸君を仕上げ上げていく楽しさを実感できた。さらに師匠の重要なメンバー受任したり、主振したりしながら一つの方向へと、作品を仕上げる楽しさを経験できた。・動物の表現も楽しかった。	否定されない。やっつたことを活かしてくる。引き出してくれる。*他の先生たちがつまづく点を、学生時代に指導から学んだ。そのことを講習会で伝えていた。く木でも動けばいい。ありえないことでもやってみると良いと言われた。自由になれた。>	全く知らなかったダンスについて基本的な事を学んだ。即興・リズムパターン・形式、作品作り等自分の指導の原点である。
行政主導の研修会で役にたったことは?	・ない	理論面や学習指導要領の目的と内容を具体的に示され理解が深まった。	1回行ったことがある。授業作りに活かせるスキルを学んだ。導入や言葉掛け、音楽の例・テーマ例。
任意の研修会等で役に立った事は?	・(女子体育入会3年目)楽しい。・表現に限らず、リズムダンスのレパートリーなど授業を行かせる内容を学べる。・ダンスに限らず授業に役立つ最新知識が学べる。	多様な指導方法を学べた。最新の情報収集できる。	大いに刺激になっている。新しい情報を収集することができることや、様々な講師の具体的な指導方法を学ぶことができ、自分の指導方法に広がりや深まりができた。非常に役立っている。
教員を希望する学生に対して。	・こんな柔軟になった。小松のところで学んでほしい。作品作りはつらいけど、動物園も良い。美観表現するのに役立った。対象をしつくり観察する事が大切。ふと、気がつくところやフルやアパレルで人間観察している。やめなくて良かった。ダンスに一生懸命打ち込む事は大切。	・表現を得意としていることは教師としての自分の強みであると、勤務先の校長にいられたことがある。その表現力が子供の前に立つ人間として教科指導を始める。あきらめずに役立ってに気がつき校長先生の言葉の意味が理解できた。	①好奇心をもって、様々なことを体験してほしい。 ②彼がスキルとして、動ける身体をもつこと。まず心も体も柔軟さを身につけてほしい。指導の指針を学んでほしい。子ども自身も、どう伸ばして行けるか。美観: 具体的な何を求めているのか? 何故そのスキルを必要とするのか? 案が大切。具体化する案が自分の案。発達・美観を知り、指導観や授業観を明確にしておく。

る事が窺える。

6) 即興表現からの授業展開について

基本的指導方法として定着し、授業当初に実施したり、イメージバスケットやイメージマップ作成後、その題材についての即興を実施し、それらの動きをもとに作品創りが進行する形が実践されている。

7) 学習者にとってのダンスの魅力

1日の大半は机に縛られている子どもたちの心が開放され、活動欲求を充足できる。自分たちの考えたことを形にでき、その動きが採用されるなど認めてもらえる場がある。高学年になると意見の衝突もあるが、意見を出し合い、お互いを理解できる。認め合う場面がある。自分はこんなことができるという自分に対する再発見ができる。運動嫌いな子も出来るという実感が持て、自己肯定感が高まると行った事が挙げられた。

8) 学習者に身につけさせたいこと

極限やダイナミックな動きができるようになるといった技術面が挙げられている。また、自分の言いたい事をはっきり言える・自己主張できるようになること。技術面より皆で自由にいい合える仲間創りが大切。明るく元気で何事にも前向きに取り組むことができるような主体性等が挙げられた。

他の質問に対しては、教師歴によって大差ない回答がなされたが、この質問に対しては教師歴の短い教員は技術的な内容を挙げ、長い教員は心の開放や自己主張できること、コミュニケーション力の向上を挙げている。

9) 授業内容から創作表現への困難点

動きの発想が乏しい。イメージが乏しい。型通りの動きやマイム（＊演技による。舞踊運動にならない。リズムパターンが明確でない。）になりがち。デフォルメができない。アドバイスすると否定されたように感じてしまう。空間構成が難しい等が挙げられている。31年目であるSKは日頃から子ども動きや変身ぶりをタイミング良く褒める。教師である自分も思いつき表情豊かに応答するといった回答を寄せており、経験に裏付けられた解決方法も提供されている。

10) 授業内容から作品へのポイント

起承転結等作品の組み立てが難しい。また、4つの崩し（リズム・空間・人間関係・身体）を指導しているが「身体」の崩しが難しい。一流れの中にジャンプやターン・誇張した動きなどを入れてマイムを崩しリズムパターンにしている等経験によって技術的な困難点をあげているが同時に解決方法も示しており、RSは難しいがそこがまた指導や作品創作の面白さ・醍醐味であることを述べている。しかし、授業時間が不足

している、十分な時間が取れない事は共通してその困難さの理由として挙げられている。

11) 表現運動・ダンスは教育に必要なか。

異口同音に必要と回答している。

12) その理由

勝敗にはない魅力がある。他の分野は能力や技術の差がでてくる。子ども同士の丸ごとの存在を認める・認め合える活動は表現運動・ダンスだけである。「学習者にとっても魅力」のところででも出現していたように、意見の衝突もあるが意見を出し合い、お互いを理解できる。認め合う場面がある。最終的には自己肯定感が高められるといった内容が挙げられた。

13) 大学時代に学んだこと

音楽専攻と大学時代ダンスを受講しなかった二人を除き、ほとんどの教師が大学での学びが基盤となっている。自分らしくやりたいことを許容された経験・物事を深く突き詰めて考える創作する楽しさを知った。頑張れる自信がついたとの肯定的な経験が現在の自分自身につながっていると振り返っている。大学時代にダンスと縁のなかった2名もダンス指導者としての尊敬できる人物との出会いがダンス指導と関わる契機となっていたり、高校時代の郷土舞踊により踊る楽しさを知ったことが、現在の基盤となっている。いずれにせよ、高校や大学での経験や学びが基盤となるってことがわかる。

梶・小松¹⁾の調査では、ダンス指導観に有意な相関は見られなかったが、積極的に指導に携わるようになった教師は大学時代の授業や部活動経験が役立つとの振り返りがある。大学時代の受講の有無だけではなく、課題とした内容に踏み込んだ調査が必要であることの一端を示すものと考えられる。

14) 行政指導の研修会の効果

全国レベルの研修会には1名しか参加しておらず、県・市レベルの研修会には参加経験があるものが多い。全国レベルの研修会参加者であるRSは指導要領との関連が明確になったことを挙げており技術的なことばかりでなく、学習指導要領との関連を深く学ぶことを要請されている。

まだまだ、行政レベルでの研修会も多数開催される必要がある。

15) 任意団体の研修会参加

ここで取り上げている団体は、全国組織である日本女子体育連盟の加盟団体であり、鹿児島県の小学校から大学・一般まで表現運動・ダンスを中心としつつも、体育指導全般を通じた、子供達へのより良い教育アプローチを目的とした団体である。ダンスを中心とする

も、会員からそのニーズを拾い上げ、できる限り最新の知見を提供でき利用に内容を検討し、年1回夏期研修会を開催している。ダンス関連では、日本を代表する講師が招聘されている。被験者の大半が「時期に応じた内容」として、ダンスを中心に授業へ活かせる内容となっている点にこの団体への所属することへの価値を見出している。また、隔年おきに全国コンクール入賞校を招待し、作品上演とワークショップを行なう作品発表会を開催し、県内児童・生徒たちへの刺激となり、現場教員の資質向上に役立っている。またその場合は、現場教師にとって自らの指導作品を上演できる数少ない機会の一つとなっており、児童・生徒を出演させるための作品作り、また指導力を磨く機会となっている。

作品発表会を開催しない年度は、鹿児島県の各地区が担当となり、開催場所を通常の鹿児島市から離れ、地方に勤務する教師の企画・運営で進められる。鹿児島市の役員だけでなく、地域の教員が活躍する場を提供するシステムが定着している。準備等時間を割かれることもあろうと思われるが、会員が所属する校種ごとに、情報交換しつつ任務に当たっている。このようなシステムが、異校種との交流や最新の教育内容について学ぶ機会となり、非会員参加者も、会員同様の資質向上や最新知識の受容に役立っているといえよう。

3. ライフヒストリー図から見えること

1) 自己認識による表現運動・ダンスの指導力の変容については図1～7に示す通りである。

小坂²⁾は、「教師は、学校現場だけでなく、一人の人間として家庭や社会、歴史との相互作用の中に生きている。」とし教授の力量の変容においては歴史や社会的要因を無視することはできないとしている。

本研究においては、小学校教諭としての表現運動・ダンスに取り組む過程は、転勤・結婚・出産など周囲の環境の変化に影響されることもあり、どのような過程を経て現在のような表現運動・ダンス指導に積極的に取り組むようになったのか興味深い。

一番勤務年数の少ないMKは、期限付きの教員を継続するも自分の力量に疑問を持ち、教員になることを諦めようとした時期もあったという。自分らしく子供たちと伸び伸び過ごすことがまず肝要と気づき、採用試験に再挑戦したとのことであった。その間も運動会のダンスは担当していた。正規教員として採用されて2年目から任意団体である女子体育研究会に参加し、研修会参加や発表会への出演等、機会をとらえて成長していることが窺える。

2番目のMHは、前述したように、高校時代の郷土舞

踊がきっかけとなり、踊る楽しさを知る。「自分と同じように踊ることを通じて達成感を味わわせたい。」ということが、幼稚園勤務後小学校教員を目指す際の重要な柱となっている。期限付き教員として勤務している際も、女子体育研究会に参加し、MAやRSを始め多くの先輩教員と出会うことが表現運動・ダンスに取り組み、児童との作品創作や発表会への出演につながっている。

3番目のRUは、前述のように音楽専科であり、正規採用までは、表現運動・ダンスとの関わりが全く無かった。本学卒業性であるRSが初任者研修の担当であったことが、この分野に関わる契機となった。容易に鹿児島市へ出られない離島勤務中、活動状況が低下するが転勤後意欲を取り戻し現在に至っている。初任者研修担当者であるRSが近隣の学校に転勤してきたこと、そのRSの同級生であるYKとの出会いもまた功を奏し、ともに頑張る仲間ができたことがさらに表現運動・ダンスに取り組む契機となっている。

4番目のMAは、踊ることが好きであり初任時代も運動会のダンスには積極的に取り組んでいたが、授業での表現運動・ダンスには取り組んでいなかった。女子体育研究会には、4年目から参加している。特に6年目から鹿児島市内に転勤し、鹿児島県で開催された日本女子体育連盟の全国大会の準備に関わる中で学んだ。現在は小学校校長を務めている当時のダンス指導者の存在も大きかったという。「イメージカルタやイメージバスケット・イメージマップ」等授業に行かせる様々な手法もこの時学んだ。作品作りや授業スキルをもっと向上させたいと16年目くらいまで思っていた。その後、離島に転勤となり、作品作りからは遠のいたが、その土地で出来ることをしようと頑張った。少数校であったが、初めて運動会に表現作品をプログラムに組んでもらったという。現在、これでいいのかと反芻しつつも20年を超える教員生活で表現運動・ダンス指導に自信も持ってきている。これから教員になる学生へのアドバイスはとの質問には、「女子体育研究会に参加して欲しいと自信を持って誘える。表現運動・ダンスの良さを自分だけでなく各教員の持ち味を生かした授業や活動を展開している多くの個性的な教員と交流して欲しい。」と述べている。

5番目のYKは、現在、県内小学校表現運動・ダンス指導の中心的存在であるRSと短大時代の同級生であり、ダンス部にも所属していた。初任校から運動会ダンスは担当していた。自分なりに学習発表会等でのダンスには組んでいたが、結婚・出産により、活動状況が低下した。指導にも悩み、子育てにも悩んだ状態が続いていたが、近隣地区にRSが転勤してきたことで、再び交流を深めるうちに、表現運動・ダンスの良さを再認識した。また、自分自身に対してもこれでいいのだと自信を取り戻すことができた

いう。第2子育休中もPTA活動や女子体育研究会に積極的に参加し、現在はRUと同一校に勤務しており、同じ価値観を持つ同僚の存在が大きな支えになっているという。

6番目のRSは、度々触れられているが現在県内小学校ダンス指導の中心的存在である本学卒業生である。学生時代の指導者に自由にありのままの自分を追求することを容認されたことが、驚きであり、そのことが現在までのダンス指導の原点となっているという。初任校時代から、恩師の主宰する舞踊グループの作品上演活動に積極的に参加していた。そこでの学びも指導法や資質向上に役立っている。さらに、女子体育研究会に参加することで、より授業スキルが向上し自分自身のみならず、他の教員への影響を与える存在に育っている。日本女子体育連盟の全国大会へ度々参加し研鑽を積むとともに、文科省主催のダンス研修会に県代表として参加している。ダンスのみならず、優秀女性教員として選出され海外視察員として派遣されている。現在はこれでいいのか悩みつつも自信を持って表現運動・ダンス指導に携わっている。

7番目のSKは、教員歴31年目のベテラン教員である。学生時代にダンスを始め、教員として勤務する傍ら、先輩の主宰する「舞踊グループ」の一員として舞踊創作活動を継続していた。さらに女子体育研究会に参加するようになり、授業スキルが向上した。

教員生活11年目にお茶の水女子大学に国内留学する機会に恵まれた。日本屈指の舞踊教育で著名な同大で学べることは、舞踊を学ぶものにとって、垂涎的である。中でも片岡康子教授（現：名誉教授）の薫陶を受け、「創作ダンスだけでなく、様々なジャンルの舞踊に触れることができた。郷土舞踊をはじめとする舞踊を文化として捉える視点を確立できた。帰鹿後、結婚・出産と続いたが、子育ての期間も子供の動きを観察し、その面白さに驚いたり子育てそのものを楽しむ余裕があった。育児休暇中の教育TV等で発信される幼児向けの体操など動きも面白さにプロの振り付け者の創作力に驚かされた。」と回想している。その後、離島の小学校に転勤となり子供をつれての単身赴任の5年間を送る。

MAと同様、ここでしかできない活動に取り組んでいる。鹿児島市での発表会等への作品創作・発表ができない代わりに、地元の踊り取り入れた授業などを展開した。環境の変化を積極的にプラスに創り変え、瞬間・瞬間を大切にしている生き方を貫いている。

25年～30年目は良い作品を作らなければというプレッシャーを感じていたが、現在では、作品を早めに作り上げ、教員・児童ともに余裕を持って作品に取り組み本番を迎えようと心がけているそうである。自分や児童に見通しを持って対応することができるようになり、効率的な時間の使い方が

できるようになったと述べている。日頃からダンスを実践していると楽しいということを痛感している。

また、若いこれから教員になろうとする学生には、好奇心を持って様々なことを体験してきてほしい。授業スキルの手始めとしては、動ける身体を作っておくこと。技術的というより柔軟な思考力を持つことであると述べている。ついで、子供観や自分の舞踊観をしっかりと考え、その上でその案の立て方を学んでほしいと述べている。

4. まとめ

以上、7名の現職教員の表現運動・ダンスの指場面に關するインタビューやライフヒストリーを概観した。

各教師は、自らの「踊り・創る」というダンス創作能力の向上を積極的に図り、またその授業スキルが向上する努力をしている。養成大学での学びを基盤にし、現場での実践に励むが、日々の悩みや迷いの解決に学校現場以外の学びである研修会や研究会が大きな影響を与えている。

内田等は、教師の成長の契機は、その教師自身の教室を中心に同心円状に拡大している事を挙げている。すなわち教師の成長はその同僚性が大きな要素を占め、教育現場の外における研修ではなく、自ら教育実践する場を中心に起きていると報告している。

本県における表現運動・ダンス指導に積極的に取り組む小学校現職教員は、自身の教室での教育実践のみならず、広く情報を外部研究会や研修会に求め、そこで得た知識や技能を自らの教育実践に還元している。また、外部研究会の教員仲間にも支えられている。

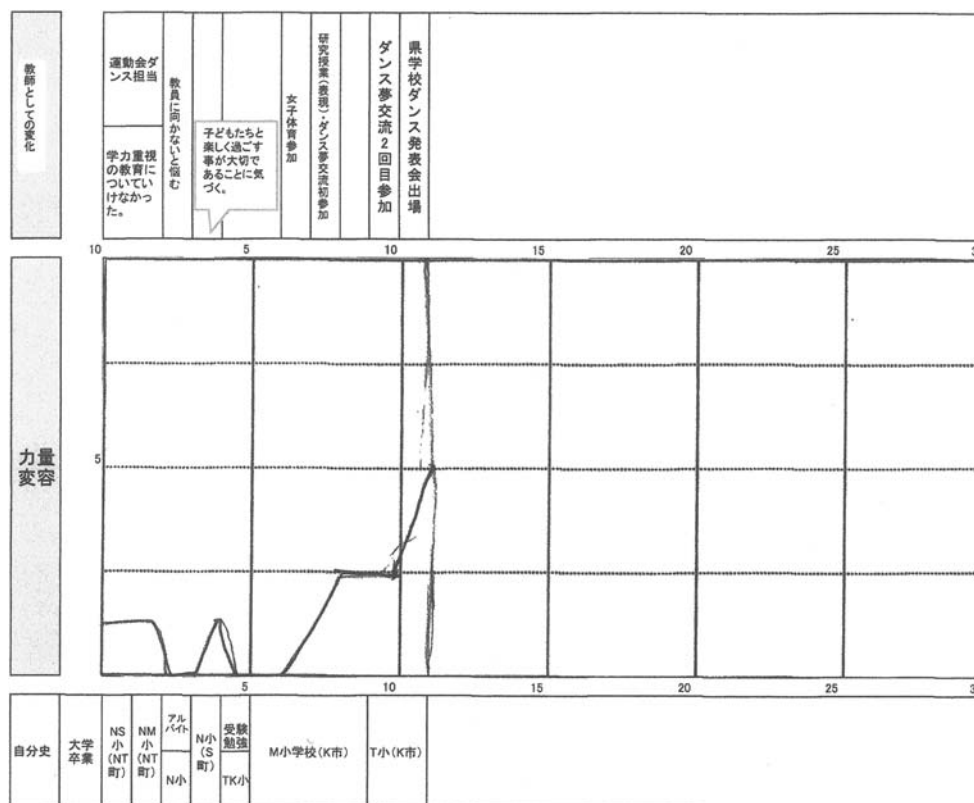
小学校教員を希望する学生へも、積極的に外部研修会等への参加を勧めている。

内田らが指摘するような同僚性だけでなく、外部の研究会に学ぶことも大きな要素を占めるという特徴がみられた。

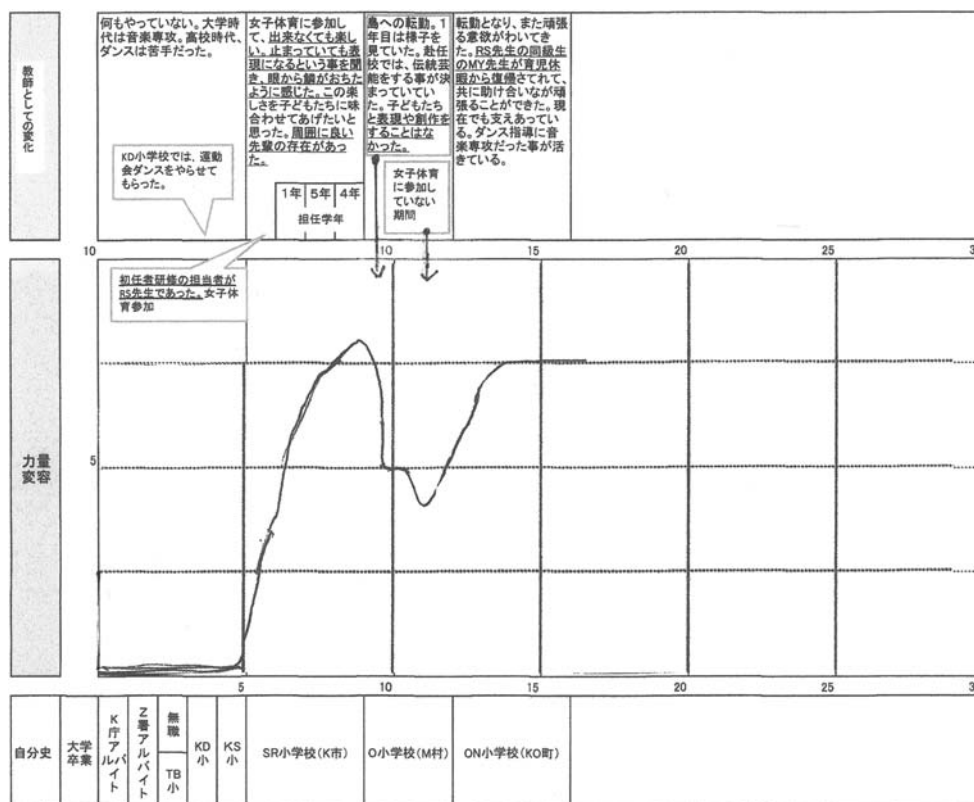
このように、指導力変容は、①ダンスに対する価値観 ②作品創作及び演出力 ③授業スキル ④機会を求める積極性 ⑤良い人間関係を構築できるコミュニケーション能力 等が組み合わせられたものと考えられる。いずれの教員も悩みつつも積極的に、自ら向上する機会を的確に捉え、必然・偶然に関わらず、良い人間関係を構築する力を持っているといえよう。

教員養成校として、教育としての表現運動・ダンスに対する確固とした価値観・指導観の育成の上に、ダンス創作能力を向上させることだけでなく、授業スキルを向上させることの充実も図って必要があろう。短期大学として時間数の確保に難しさは伴うものの、内容を精選し伝える工夫が課題といえよう。

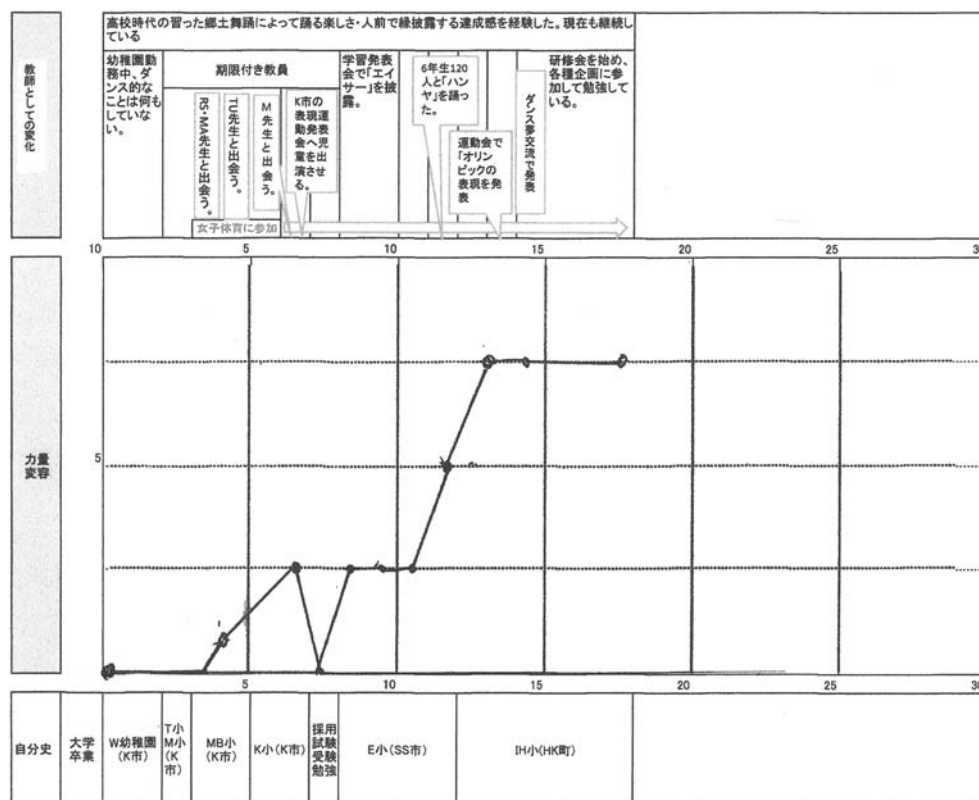
これから小学校教員を目指す本学学生にとって貴重な情報を多く得ることができた。個々の教員の個人史は様々で



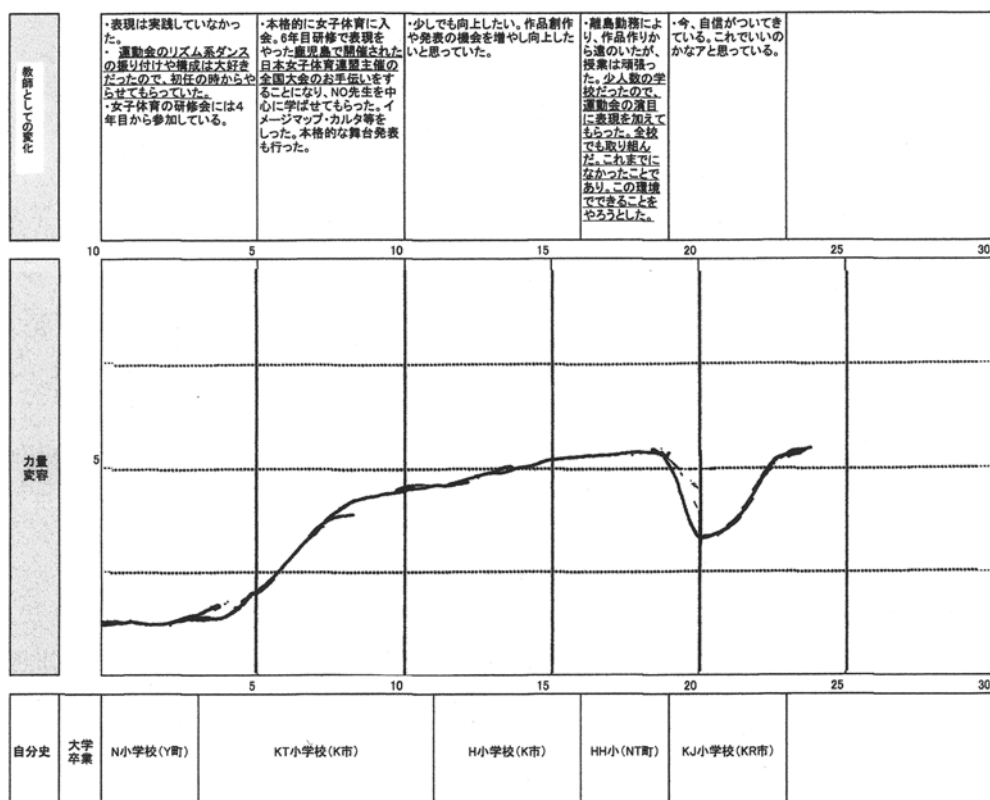
<図1: MK ライフヒストリー図>



<図2: RU ライフヒストリー図>



<図3：MH ライフヒストリー図>



<図4：MA ライフヒストリー図>



あるが、これらの現職教員の来し方や思いを知ることにより、具体的な現場での目標確立やあり方を決定づけるための糧となることを示し、結語としたい。

引用・参考文献

- 1) 椿ちか子・小松恵理子：「現職教員のダンス授業実践に影響を及ぼす要因に関する検討ー鹿児島県に置けるダンス実技研修会のアンケートよりー」九州体育・スポーツ学研究, 第30巻 第1号, 2015
- 2) 小坂法美：「ニカラグア小学校教師の自己認識による教授的力量的変容ーライフヒストリー法による分析ー」広島大学教育開発国際協力センター「国際協力論集」, 第11巻第2号 pp61～74, 2008
- 3) 中村久子：「明日からトライ！ダンスの授業」(株)大修館, p135 p154, 2011
- 4) 中野卓・桜井厚：「ライフヒストリーの社会学」弘文堂, p191, 2002
- 5) 寺山由美：『「表現運動」を指導する際の困難さについて、ー千葉県小学校教員の調査からー』千葉大学教育学部研究紀要, 第55号 P180, 2007
- 6) 寺山由美：『「表現運動・ダンス」指導時の「即興表現」に関する研究ー舞踊家のクリエーション・スキル」を切り口としてー』, 筑波大学体育科学系紀要, 第33巻 P249～251, 2010
- 7) 内田豊海・松崎康弘：「鹿児島における教師の職能成長に関する研究 ～新規採用教師を取り巻く環境に着目して～」南九州地域科学研究所所報, 第31号 pp1～6, 2015
- 8) 安田純子：「学校ー大学の協働による教師教育の構築に関する研究ー教師の職能教育発達を中心にー」岡山大学大学院修士論文, 2004

(2016年12月2日 受理)